

## 透き間

作 山口茜

## 登場人物

季節・・・三月から四月にかけて

ところ・・・とある国の、いくつかの村で構成された山。

物語の下敷きとなった『砕かれた四月』（作…イスマイル・カダレ）は、20世紀初頭のアルバニアの山を舞台にしている。20世紀初頭のアルバニアといえは、オスマン帝国がアルバニア人たちにアイデンティティを芽生えさせないために中央集権を強めていた時期で、サファリ・ロが訪れたことのあるコンポも含まれるが、第一次バルカン戦争が1912年に起きており、その後アルバニア公国となってからはそこにコンポは含まれない。

ただ、山においては、中央の統治は愚か、法律すら届かない独自の掟、通称カヌンによって統治されているため、中央で起きていることによる直接的な影響はなかった。ただし戦争などは人々の心理には大きく影響し、復讐の数が激減するなどしていたようだ。

今回の上演台本における登場人物の名前について、この物語が日本在住者によって演じられることを想定し、地域が限定される名前を避けたいと考えた。また、時期的には人々は、オスマン帝国の支配とそこからの独立を目指す大きなうねりの中にいたため、平和のなかで緩んだ受け身の身体ではなく、子供でいうところの反抗期のような、自立を目指す身体だったと考えている。

しきたり・掟・・・守るべきものとして既に定められている事柄。  
誓い・・・あることを成し遂げようと自分の心に決心すること。

**リュウカ** 山に住む人。しきたりに従って人を殺し、次に殺されるまでの猶予を生きる。

**ネリネ** 町に住む人。スイカズラの婚約者。

**トリカブト** 山とある村の長。娘がいる。

**スイカズラ** 町に住む作家。村長に呼ばれ山の物語を書くために取材にやってくる。

**ザクロ** 山に住む公務員。山を治める王家の親戚のもとで、

復讐の数を管理する役職についている。

**キク** 山に住む老人。スイカズラの取材の途中でネリネと

出会い、やがてネリネと生活を共にする。

**黒子たち** シーン毎の情景を助ける黒子として動くが、子供と

キクには見えて、大人には見えない神話の世界の生き物や、町の友人たち、村の群衆としても存在する。

\*ネリネの幼少期、ネリネの母は、ネリネとキクが演じる。

\*山に住む、トリカブト、ザクロ、キクは関西弁を話す。

\*黒子たちは登場人物全員で演じる。

## 第一幕一場

### 1 プロローグ

透き間から手が出てくる。規則的な動きをしている。それはしきたり、ルールを表している。乱れるものは許されない。

映像…白い花が揺れている。

誰かの手が撃たれる。その手がなくなっても、手の動きは途切れない。また新たな手が補充され、動きは続いていく。それは手に留まらないかもしれない。そのうち、撃たれることそのものが、舞のようになっていく。一つの手が、生えてくる。

### 2 風穴

神話の世界。

透き間から出てきた手はリュウカのものだ。リュウカは人も家畜も生者も死者も通る道を、歩いている。家はほとんどなく、荒れた土地が続く。人の姿もほとんどない、春が来る直前のある一日。時々、出会うのは、とうもろこしを担ぐ者、敗れた傘をさす者、婚礼参列者、牛をひく者、誰かを撃った者、税を納めて村へ戻る者。そして見覚えのある男。

リュウカはその男に近づくと、やはり倒れていなくなる。生きていられると思ったらそれは亡霊、あるいは死体で、リュウカは自分と同じ生者を求めているが、その実、リュウカ自身もまた、亡霊なのかもしれない。リュウカはまた誰かを見つけると、やはりいなくなる。リュウカはしきたりに従い、とある

男の後ろから忍び寄り、狙いを定めて頭を撃つ。撃たれた男が倒れる。

映像…地面をまだらに覆っていた雪が細かく舞う。

### 3 透き間かぜ

ネリネの生家。

小さな子供が、室内を走り回っている。それはとても自由で、取り止めもなく、エネルギーに溢れている。ネリネが現れる。

亡者「本日はご来場くださいまして、誠にありがとうございます。わたしの名前は、確かネリネ、だったと思います。あの子はわたしが子供だった頃。まだ、5歳か6歳。わたしは母と二人、小さな町にある小さなアパートで暮らしていました。それでは今から、わたしが子供だった頃の母をやります」

母「お父さんの真似をするな！」

子供は立ち止まる。

母「あんたのお父さんは最悪だった。実務的なことに何一つ関心がなかった、生きていくのに必要なこと！何かわかる？・・・お金よ、お金！今日食べるものを買うためのお金、そしてそれを稼ぐと言うこと！目の前にいる幼子を抱えた私のことなんて、存在しない誰かみたいに、じゃああ

の人はいったい、何をしていたかって、遊んでいたの！あんなに今やってるみたいに！」

子供は走り出すがすぐに母に捕まる。

亡者「母はいつもこうやって、私からコトバとリズムを追い出し、代わりにがらんどうになった私の心に乗り込んできて、独り居座り開き直り、得意げな顔でこう言いました」

母「だからこう考えましょう。あなたの父さんは死んだの。ほら、今、吹き抜けた風。あれは誰にも見えない、細い透き間から、こっそり忍び込んでくる風。あの風にさらわれて、いなくなってしまったの。お前もそうやって夢ばかり見ていたら、どうなると思う？」

黒子たちはなるべく見えないように透き間風を吹かせる。

母「ほら・・・すぐそば、すぐそばまできている。透き間が、口を開けて、私たちを飲み込もうとしている・・・あっちいって、あっちへ行け！あっちへ行けえ！！！」

子供「母さん。その想像力は、いったいどこからやってくるの？」

母「想像？これは想像なんかじゃない！全て現実、本当のこと」

子供「本当のこと？」

母「さらわれたくなかったら怖がりなさい！ほら・・・ぎゃー！！」

子供「ぎゃー」

母「違う！ぎゃあっ！」

子供「ぎゃー」

母「もつと！ぎゃあつ！！！」

子供「ぎゃあ！！！！！」

母「怖がるんじゃない！」

子供「ええ！？」

母「だってほら、私がいるじゃない」

子供「・・・」

母「心の透き間を埋めてくれるのは歌じゃない、踊りじゃない。私なの！」

亡者「空っぽだった私の体は母に乗っ取られ、居場所を追われた私の心は空に彷徨うことになりました」

#### 4 村長の苦悩

山の道端。

山の麓にある、とある村。山にすむ人々は関西弁を話す。黒子がやってきて耳打ちする。

トリカブト「何何、管理官様からの伝言・・・ほうほう、シロツメクサの咲く頃に、隣の村の焼き払いを行う。ついには其方の村より、村人10人と松明10本を提供するように。（ため息をつき）また人が死ぬな・・・え？隣村には娘が住んでる？あそう、それはまたえらい災難やね。じゃあ頼んだぞ・・・え？かわいい孫が生まれたところ・・・あ、そう・・・それはまたダブルの悲劇やねえ・・・あ、写真？見せて見せて・・・うわあ可愛いなあ・・・じゃ

あ、頼んだぞ。・・・え？娘家族は悪くない？お前・・・口を慎め・・・ええか、これは良いか悪いかという話ではない。しきたりや。誰かがしきたりを破った、だからその連帯責任で隣村が焼き払われる、それもまたしきたりや。お前もようわかってるやろう・・・ええ歳して、そんな駄々こねて・・・なんやもう！娘家族を逃したい？しょうがないなあ」

どこからともなく黒子が二人出てくる。黒子は囚われる。

## 5 夜鳴く鳥

ネリネの生家。

亡者「私はいつも母の役に立たなくてはと必死で自分を奮い立たせていました。役に立たなくては家にいてはいけなかったからです。でもそう思えばそう思うほど、私の体は動かなくなりました。母は昼間も仕事をしていました、夜になるとまた、家を出ていきました」

母は玄関のドアを開ける。子供は追いかけるが、目の前で扉が閉まり、一人きりになる。

トリカブト「俺にも娘がいるからようわかる。目に入れても痛くない。娘っちゅうのはそう言うもんや。わかるよ。だか

ら俺は考えた。お前自身に火をつけてやる。そしたら娘が哀しむ姿は、見なくて済む・・・なんやもう・・・え？用

件がもう一つある？近々、お前の村に、ほうほう、客人がやってくる。40歳独身、その客人の世話をしてほしい。・・・独身？」

黒子は連れて行かれる。

母「子供の頃、母と二人だった頃、いつも暗い場所にした、私、独り、裸足で、暗闇に光るやかん、カビに侵食されたみかん、とろみのついた古い麦茶、いつからここにあるっけ 違ったっけ 私はそれを見ながら、カルキくさい水道水を飲む 暗闇に光るやかん 今にも噴火しそうな火山 だけどそれはいつも不発で 足から登ってくる無情な冷気に 慌てて靴下を履く みたいに穴から顔を出した小指 この小指の健気さ お前だけはその思い出 なかったことにしないでおくれ 私の思いを押し付けて それから 掴む 本の表紙 この分厚い表紙を開けば そこにはかつての神話が広がって

子供が本を開くと神話の世界が立ち上がる。

人間でないような生き物、人間でないように感じられる色のものが並んで立っている。神が、踊る。子供は神話の世界に入り込む。子供はそこで、亡者たちと踊るうち、大きく成長し、ネリネとなる。そして大人になった時、リュウカと出会う。

「もう人類はおしまいかもしれない あなたの目はそう言う  
って 私の胸を見た 空っぽの胸 響く 夜なく鳥の声  
いつのことだったか 明け渡した  
ドアを開けたらそこに立っていた 虚な死者の群れ 入っ  
てきたのは誰だったのか 鍵を奪って行った 時さえも超  
えた 動機に突き動かされて

もう人類はおしまいかもしれない 私がそこに戻りたいだ  
なんて あの時あった虚な現象から 鍵を取り戻して ド  
アを開ける 空っぽの胸 棲みついた 夜なく鳥を肩に乗  
せて ここは私の胸なんだって そんなことを言うなんて  
もう私たちはおしまいかもしれない そう思っているのは  
あなたじゃなく 時さえも超えた 虚な死者の群れ」

ネリネ「ねえ、私を連れて行って。あなたのところに、あ  
なたの住む世界に！そこはきっと素敵なんでしょう、太陽  
はいつも人を照らしていて、暖かくて、人はいつも笑って  
いて、歌って踊って遊んでいる」

リュウカは踊るのをやめ、黙ってネリネを見つめる。

世界がみるみる、山の世界のように灰色に染まっていく。

映像…ここは、時間のない場所 太陽に見えるのは 潰れた

花 切り落とされた一握の日々

透き間風が吹く。

ネリネは本を閉じる。

亡者「こうして私は大人になりました。怖くなかったもの  
を恐れ、恐れていることを恥ずかしく思い、それを隠すた  
めに、私を乗っ取ってくれる誰かを求めて彷徨う日々が始  
まったのです」

## 6 血の管理官

山の道端。

スイカズラは客席の方を向く。そばにはスーツケースが二つ  
置いてある。

スイカズラ「本日は、ご来場くださいまして、誠にありが  
とうございます。僕はこの舞台の原作を担当しました、ス  
イカズラと申します。・・・ありがとうございます。今回  
の舞台となったこの山、そしてこの山に代々伝わるしきた  
りを小説にするのは、僕の長年の夢でした。思えば数年前  
のこと、初めてこの村を訪れた日のことは、今でも昨日の  
ことのようにありありと思ひ出すことができます」  
ザクロ「何をぶつぶつぶっおっしゃってるんですか」  
スイカズラ「え？」

ザクロ「・・・」

スイカズラ「あ、すいません。今から書く小説が賞をとっ  
て舞台化されて、初日の舞台挨拶に招かれたときのことを  
考えてました」

ザクロ「素晴らしいな」

スイカズラ「あ、でもまだ1文字も書いてない」

ザクロ「いえいえ素晴らしいのはその頭ですよ」

スイカズラ「頭？」

ザクロ「めでたい頭」

スイカズラ「ああ！こう言うイメージトレーニングの積み重ねが受賞を引き寄せると編集者から言われたんです」

ザクロ「折れへんな」

スイカズラ「え？」

ザクロ「村長から伺いました。あなたはしきたりの中でも特に、復讐の掟に興味をもってらっしゃるとか」

スイカズラ「そうなんです。家族のものが殺されたら、必ず復讐しなくてはならない掟」

ザクロ「・・・」

スイカズラ「復讐が義務付けられるなんて、まるで神話の世界の話みたいで」

ザクロ「つまりそれが、人間が動物ではないという証拠なんです」

スイカズラ「え？」

ザクロ「しきたりは、この山の秩序のためにあります。人間は弱い生き物です。ともすればすぐに生に執着し、空っぽのまま生き延びようとする。そうならないために、我々はしきたりを通じて死の深みを知り、恐怖を克服することで名誉を得ます、しきたりこそが、我々山に住む人間に、生の実感を与えてくれるのです」

スイカズラ「・・・」

ザクロ「何を書いておられるんですか」

スイカズラ「面白い言い回しだなと思って」

ザクロ「どのあたりが？」

スイカズラ「・・・」

ザクロ「スイカズラさん」

スイカズラ「・・・はい」

ザクロ「自由に書いてください。ぜひ、自由に」

スイカズラ「ありがとうございます。はい、ぜひそうさせていただきます」

ザクロ「村の人間も誇りに思うでしょう。古から伝わるしきたりが、あなたの描く小説によって、多くの人知られるんですから」

スイカズラ「・・・あのところで、こういったお仕事をされているんですか」

ザクロ「私ですか。ああ、申し遅れました。本日はわざわざ遠いところからお越しくださいまして、本当にありがとうございます。私はザクロ。この山の、血を、管理しています」

## 7 紹介

山の道端。

トリカブトが走り込んでくる。

トリカブト「管理官さま！管理官さま！」

トリカブトは息を切らしている。

トリカブト「大変お待たせして申し訳ございません！その十字路で、馬が暴れ回っております」

ザクロ「・・・」

トリカブト「なんとか無事、捕獲いたしました！」

ザクロ「飼い主は何をしてるんですか」

トリカブト「黒いリボンです、道に倒れておりました」  
「・・・えっと、こちらが、客人の」

スイカズラ「黒いリボンって？」

トリカブト「あー・・・」

ザクロ「まさに、復讐の掟によって殺されたものですよ」  
スイカズラ「復讐の掟！（メモを取りながら）その人がまたどうして馬を」

トリカブト「まあまあその話は後でゆっくり。ようこそいらっしやいました、大変やったでしょう、はるばる、こんな辺鄙なところまで」

スイカズラ「いえいえ」

トリカブト「私は、村長のトリカブトと申します」

ザクロ「村長にはこの山の案内を頼んであります」

スイカズラ「ああ、どうもよろしくお願いします」

ザクロ「では、私はここで」

トリカブト「お任せください！」

ザクロがいなくなる。

舌打ちをするトリカブトを凝視するスイカズラ。

トリカブト「あれは村人からの成り上がりだね。ここら一带を支配する王家の親戚に偶然気に入られて、あの地位を手に入れたんですけど、ほんまエラそうに」

スイカズラ「・・・」

トリカブト「ところで先生は、今日がなんの日か、ご存知ですか？」

スイカズラ「いや、なんだろ」

トリカブト「当ててください」

スイカズラ「えっと、なんか、山の記念日とか？」

トリカブト「今日はなんと、私の娘の、誕生日なんです！」

スイカズラ「あ、そうですか」

トリカブト「18歳になりました」

スイカズラ「おめでとございます」

トリカブト「うちの娘は都会が大好きでして。今夜は先生に、我が家にお泊まりいただきますから、もしよかったらぜひ都会の話をお聞かせいただければと」

スイカズラ「もちろんです」

トリカブト「ありがとうございます。その後はぜひ一緒のお部屋にお泊まりいただければと」

スイカズラ「一緒のお部屋？」

トリカブト「はい」

スイカズラ「誰と？」

トリカブト「うちの娘と」

スイカズラ「誰が？」

トリカブト「はははは、さすが、えらい先生はなんでもどストレートですな」

ザクロ「楽しそうですね」

ネリネがザクロに連れられ戻ってくる。

ザクロ「そこで道に迷っておられたので」

スイカズラ「ああ、すみません」

ネリネ「ありがとうございます。助かりました」

ザクロ「いえ」

トリカブト「せやけどトイレですよね？ここまっすぐ行っ  
たらすぐに」

ネリネ「私トイレに入るときに右に曲がっちゃうと、トイ  
レから出る時も右に曲がっちゃうんですよ」

ザクロ「・・・どう言うことですか」

スイカズラ「僕もよく聞くんですけど何を言っているのか  
よく分からなくて」

トリカブト「ところでこちらは・・・」

ネリネ「ネリネと申します、よろしくお願いします」

トリカブト「えっと、」

スイカズラ「今回の取材は、恥ずかしながら婚前旅行を兼  
ねて居りまして」

トリカブト「婚前！」

スイカズラ「はい」

トリカブト「ということは婚約者」

ネリネ「はい」

スイカズラ「ということはまだ結婚していない」

スイカズラ「そう」

ネリネ「ですね」

トリカブト「ということはまだ間に合いますね」

スイカズラ「・・・間に合うとは？」

ザクロ「村長」

トリカブト「はい！」

ザクロ「お願いしますよ」

トリカブト「お任せください！どうぞ、こちらです」

トリカブトはスイカズラ達の荷物を持つ。

スイカズラ、ネリネは、トリカブトに案内されて今夜泊まる

トリカブトの家へ。

残されたザクロは忌々しくスイカズラとネリネを見つめてい  
る。

## 8 しきたりの意義

トリカブトの家の客室。

先に映像が始まり、しきたりの内容が映し出される。

その後にスイカズラが本をめくっている様子が見えてくる。

映像「炉をもち、煙を発するものは住居である」<sup>1</sup>

ページをめくる。

映像「山人の家は、神と客の住まいである」<sup>2</sup>

ページをめくる。

映像「客人は、決して鍋の蓋を開けてはならない」<sup>3</sup>

<sup>1</sup> イスマイル・カダレ（平岡敦訳）『砕かれた四月』白水社

1995年。

<sup>2</sup> 同上

<sup>3</sup> 同上





んでも進んでもたどり着けない、幽玄なオアシスみたい  
に」

## 10 羨望と批判

トリカブトの家の客室。

部屋には眠るスイカズラの横にネリネがいて、友人達が婚前  
旅行に見送ってくれた時にかけてた言葉を思い出している。

映像..

「復讐の掟」

「え」

「本当に？」

「あの人と？」

「結婚？」

「あなたが？」

「新婚旅行？」

「あんなところに？」

「どうして？」

「羨ましい」

「わかってたでしょ」

「あの人はすごいひと」

「変わったひと」

「覚悟しなさい」

「羨ましい」

「あなたは結局幸せなんだから」

「夢の国へいくんだから」

全ての人が自分を羨ましがっている気がして、笑いが止まら  
ないネリネ。

「伝説の村」

「神話の世界」

「石造りの家」

「体の芯まで冷え切る場所」

「そんなところで眠れる？」

「まだ春も来ていないというのに」

「本当に愛されている？」

「彼は自分のことしか考えていない」

「あなたがいくのは伝説の集落」

「血讐の残る、未開の地」

「今もお、受け継がれる」

「神話の世界」

## 11 半神

徐々に空気が変わり、恐ろしくなってくるネリネの前に現れ  
るのは、リュウカ。

リュウカはネリネを連れて行こうと手を伸ばす。ネリネは恐  
れて、叫ぶ。

ネリネ「ああ！」

## 12 陰り

トリカブトの家の客室。

スイカズラが目覚める。

ネリネ「ああ・・・ごめんなさい、起こしちゃった？」

スイカズラ「夢を見た」

ネリネ「夢？」

スイカズラ「誰かを銃で撃つ夢。でも撃たれた瞬間に、僕はもう、死んでいるんだ」

ネリネ「どう言うこと？」

スイカズラ「銃弾に倒れ込んだのも僕だし、その僕を背後に走り去っていくのもまた、僕だった」

ネリネはスイカズラの手の上に手を重ねる。

ネリネ「いい旅行になると思う」

スイカズラ「いい旅行って？」

ネリネ「あなたが素晴らしい小説を書くということ」

トリカブトが入ってくる。

トリカブト「お取り込み中すみません」

スイカズラ「なんですか」

トリカブト「・・・いやあ申し訳ない。すっかり忘れてたんですけど、奥様の寝室は下なんです」

ネリネ「した？」

トリカブト「この村では、まだ契りを交わしていない男女は、同じ部屋で寝てはいけないことになってまして」

ネリネ「え？」

トリカブト「それとこの部屋は客人の部屋。女人禁制なのです」

スイカズラは立ち上がる。

スイカズラ「それもしきたりの中にあるんですか」

トリカブト「はい、確か、5ページだったと聞いてます」

スイカズラはしきたりの本をめくる。

スイカズラ「面白い。これは客人も例外ではない・・・」

スイカズラはそのページを読みふけり、ネリネの方は気にかけない。

トリカブト「では」

トリカブトはネリネに目配せし、ネリネは立ち上がる。

トリカブト「それでは、どうぞ、ゆっくりおやすみください」

スイカズラ「あの、すみません」

トリカブト「はい？」

スイカズラ「この本、何処かに売ってないでしょうか」

トリカブト「残念ながら販売はしておりません。しかし、ご安心ください。どの家にも必ず、置いてありますから」  
スイカズラ「旅館にも？」  
トリカブト「必ずあります、しきたりは、山人の心ですから」

ネリネはトリカブトに促されて部屋を出ていく。

## 二場

### 13 天を仰げ

避難の塔。

映像・十万からすごい勢いで1ずつ減っていく数字。

亡者たち。その中央に立つザクロ。まだザクロは亡者の一人のようにも見える。

一方トリカブトの家。トリカブトの後ろをついて地下の階段を降りていくネリネ。薄暗い物置部屋に通され扉が閉まる。

映像・数字の間に時折、女の目が入り込んでくる。ネリネの目。バグってるイメージ。

ザクロ「えー、ご存知の通り、復讐の数は減り続けています。この土地に住む人の数や、収穫されたとうもろこしの量、婚姻の数、出生の数・・・それらあまつたると人間の欲望は一つも減りはしない、むしろ増えているというのに、我々に分別と名誉をもたらす復讐の数だけがこの十年、減り続けているのです。

天を仰げ 雲を数え 銃弾に倒れ 名誉守れ

耳を撃く親王の声

声・・・お前は無能で役立たずやね

ヒエエエエ・・・

階下に見える 人の群れ 死への門出を待つ雑魚寝

俺は特別 選ばれしもの これは無能な奴らのしわよせ

オエ・・・オエ・・・

この世に必要な ないものは 思い出 差し入れ 愛 女

・・・あの女・・・ヒイイイイ・・・失礼・・・我々が

守るべきものは名誉です、今我々に求められているのは、

種を巻いて水をやり、咲かせた花を、その手で握り潰す勇

気を持つということなのです」

### 14 無意識の再会

トリカブトの家の、物置部屋。

スイカズラの宿泊する部屋とは程遠い、物置のような汚い部屋に通されたネリネ。

ネリネ「いやーむり、絶対無理・・・真っ暗無

理・・・（何かを踏んで）ヒャ！何今の、死ぬ、死ぬ、死ぬううう！

言うてる自分の声が怖い！！」

亡者「その頃の私は暗闇が全くダメでした。ひとり夜を過ごすことができなかったのです。ただ怖いというより、

一人でいると、私の体が溶けてなくなってしまおうような苦しみに襲われるのです」

ネリネ「あ、窓」

ネリネは窓に近づく。

一方、客室の窓からやはり外を見つめるスイカズラ。

二人は窓越しに、お互いに気がつき手を振りあう。

ネリネ「この窓の向こうの星の瞬き 教えてくれたあなたは今 空に彷徨い 雲に飛び乗り 地球持ち上げ 大地を蹴った あなたは踊り 私は歌い 風が吹いたら その風に乗った あなたはいつも 私の手を握り 蒼く染まった月に腰を掛けて……」

ネリネは歩くリュウカを見つけて窓を開ける。スイカズラもまた、リュウカを見つめる。

ネリネ「あの、人、なんで、なんであの人がこんなところに」

スイカズラ「あれは……黒いリボンをつけた人……人を殺した男だ……おーい！！おーい！！」

リュウカはスイカズラに声をかけられ、こちらを見る。ネリネは窓を閉める。

スイカズラ「ちょっとお話聞かせてもらってもいいですか？」

スイカズラはトリカブトの家から出て来て、リュウカの歩いていたところまでいく。しかしリュウカはいない。

スイカズラ「ハア……確かにいた……黒いリボンの人……確かに……ここに……」

## 15 楽しいドライブ

旅館の前。

トリカブトが車の前に立って、スイカズラとネリネを迎える。

トリカブト「いやあくおはようございます！よく眠れましたか？」

ネリネ「はい！おかげさまで」

トリカブト「それはよかった。先生の方は」

スイカズラ「ちょっと眠れなくて。興奮して」

トリカブト「そりやそうですよ。ここに來られたんですから！ほら、ご覧ください、今日は雲ひとつないキレイな曇り空！これは絶好の取材日和ですよ！ささ、どうぞお乗りください」

二人は車に乗り込む。

トリカブト「それでは出発します。途中道が悪く車が揺れることがありますので、そのときはお二人とも、手すりをお持ちください。では、いざ、山の旅へ！」

車は本当によく揺れる。その度に後部座席の二人はあっちこちへと転がる。

スイカズラ「あれはなんですか？」

ネリネがスイカズラの指差す方をみる。

トリカブト「ああ、あれはとうもろこしを担いでいるんです。この辺りにある畑はほとんどがとうもろこし畑なんです」

スイカズラ「この辺り？」

トリカブト「去年までは立派なとうもろこし畑が広がっていたんですよ……」

また車が揺れる。またスイカズラが指を差す。

スイカズラ「あれはなんですか？」

トリカブト「ああ、あれは嫁入りですね。山では嫁入りをするときに、両親は娘に毒薬を持たせるんです」

ネリネ「毒薬？どうして？」

トリカブト「娘はこれからはあなたのものですよという、お手紙みたいなものですよ」

また車が揺れる。今度はキクが倒れている。

スイカズラ「今のはなんですか？」

トリカブト「ああ、あれはおばあさんです。この地域ではよく倒れているんです」

ネリネ「へえ」

スイカズラ「まって」

トリカブト「え？」

スイカズラ「止めてください！」

車が止まる。スイカズラは車から降りてキクのもとへ。ネリネも駆け寄る。二人はキクを起こす。

スイカズラ「大丈夫ですか？」

キク「父が死んだ」

スイカズラ「そうですか」

キク「兄も死んだ」

ネリネ「そうですか」

キク「弟が死んで」

スイカズラ「弟さんまで……」

キク「夫が死んだ」

ネリネ「ご主人も亡くなったの」

キク「息子が死んで」

スイカズラ「息子さんも？」

キク「甥が死んで」

ネリネ「甥ごさんまで？」

キク「昨日の夜から」

スイカズラ「昨日の夜から？」  
キク「孫が狙われている」

スイカズラはペンを取り出し何かをメモしはじめる。

スイカズラ「え、ちょっと待ってください、じゃあ外に人がいないのもしかして、みんな殺されているから？」  
トリカブト「それもありませんし、これから殺されるかもしれないものたちが、殺されないように家の中に籠っているのです」

スイカズラ「てことはさっき荒れていた畑は」

トリカブト「殺される番の回ってきた家の畑ですね。手入れなんかしてたら殺されてしまいますから」

スイカズラ「だから年老いたものが道で転んでいても」

トリカブト「誰も助けることができない。しかも転んでいるのはだいたい女」

スイカズラ「なぜなら男は既に死と戯れているから！」

トリカブト「さすがですね。表現がポエム」

「父が死んだ、兄も死んだ、弟が死んで、夫が死んだ、息子が死んで、甥が死んで、昨日の夜から、孫狙われてる、それがおきて、復讐のおきて、代々伝わる古の、古い古い古い古いしきたり、破れば火付け 村八分  
母は泣いた、姉も泣いた、妹が泣いて、妻が泣いた、娘狂って、姪が狂って、昨日の夜から、孫が来るって」

ザクロ「死の畑を耕せ、死を創出するところを見極めろ、墓地はすっかり暇を持って余している、荒地こそが死の畑、生きようとするとするな、無能どもめ、墓地を遊ばせるな、屈辱から逃れる道は、掟の中にしかない！」

キクは回覧板をネリネに渡す。

ネリネ「何これ・・・回覧板？」

## 16 回覧板

近くの村。

ネリネとキクが回覧板を持って近所を回る。キクが渡そうとしても届かない回覧板を、ネリネが手渡す。その先に出てくる「手」。回覧板を受け取ってしばらく家の中にひそみ、また手だけで回覧板が戻される。それを受け取り、次の家に向かう二人。あらゆるところから手だけが出てきて、回覧板を受け取り、内容を確認して戻す。最初は慎重だった手も、だんだんとリズムカルに出てくるようになり、ついには歌い出す。

「手が読む 回覧板 手が読む 回覧板 手に目がついていて 言葉を話し 食事をする口までついている 手が読む 回覧板 手が読む 回覧板 目はどこ 回覧板 ものいう 手」

突如、キクが一つの手を握る。

キク「やっと会えた。大きくなって・・・綺麗な手えや、綺麗な手えや。ご紹介します。孫です」

銃声。キクの抱きしめていた手が倒れる。

## 17 嘆きのドライブ

トリカブトの運転する車の中。

無言で座るネリネ。行きと同じように車は非常によく揺れるが、ネリネだけは違う空間にいるように見える。



18 噂話

旅館のテラス。

二人は今日泊まる予定の旅館に到着する。

トリカブト「到着しましたー！こちらが本日宿泊いただく旅館でございます！」

ネリネはスイカズラに支えられ、旅館の中に入る。

トリカブトはテラスに置いてあるテーブルに腰掛ける。

トリカブト「やあしかし、今日は実にいい天気ですなあ」  
スイカズラ「この土地では、曇り空を良い天気というのですか」

トリカブト「太陽が照っていると、その重みで空が傾くんですよ」

スイカズラ「え？」

トリカブト「はい」

スイカズラ「え、どういうことですか？」

スイカズラはトリカブトの正面に座る。

トリカブト「どうします？この後。取材、続けますか」

スイカズラ「空が傾くってというのは・・・」

トリカブト「例えです、例え。そういうんですよ、山ではよく」

スイカズラはネリネの行った方を見る。

トリカブト「ご心配なく。さっきみたいなのは滅多におきません。そのためにみんな、家の中にこもっているんですから」

スイカズラは鞆からノートとペン、そして飲み物を出す。

スイカズラ「・・・飲みますか？」

トリカブト「いや、私はそういうのはあんまり」

スイカズラ「へえ、すぐいけそうなのに」

トリカブト「よく言われます。でも匂いだけでもう（匂いを嗅いで）オエーッ」

スイカズラ「へえ・・・じゃあ、こっちな」

トリカブト「これは・・・」

スイカズラ「明治のアーモンドチョコレートです。よかつたらおひとつ」

トリカブト「（一口に掘り込んでから）この先、ちょっと行ったところの村でね、去年の暮れ、若い女が殺されたんです」

スイカズラ「女？」

トリカブト「どこの誰かわからん男の、子供を孕んでたんですなあ、そんなことは恥だと言って父親が娘を殴り殺した」

スイカズラはメモを取り出す。

トリカブト「ところがお腹にいた胎児が男の子だったと知って、今度は男の家族が騒ぎ始めた。自分ところの子供が殺されたというんです。そうしてお腹の子供を巡って二つの家は対立し、あわや復讐関係を結ぶのかと思われるその時、華麗に現れたのが私です」

スイカズラ「あなたですか」

スイカズラは必死になってこの話を書き留めている。いつの間にかその話を、扉を開いて聞いているネリネ。

トリカブト「受胎したばかりでもそれが男なら男親の家族です。それは確かなのですが、そもそもなぜ、誰とも婚姻関係を結んでいない女が受胎したのか。ご存知ないと思いますがこの土地では・・・婚姻関係にないもの同士が子供を作ることは、固く禁じられております。そして、客人もまた、例外ではないんです、先生」

スイカズラ「ん？」

トリカブト「まだ間に合います。どうか、ぜひ、私の娘に会っていただきたい」

スイカズラ「そういう話ですか」

トリカブト「それ以外に何があるっていうんです。お願いします。私は、娘の幸せだけを頼りに生きてるんです。娘さえ、娘さえ無事、町に出てくれたら、あとはもう」

スイカズラ「村長さん、お気持ちはよく分かります。でも、娘さんにも娘さんの考えってのがあってしょう」

トリカブト「え？」

スイカズラ「だって、例えば私のこと、何もご存じないでしょうし」

トリカブト「小説家だって言ったらわかったって言った」

スイカズラ「わかったって？」

トリカブト「結婚しますってことです」

スイカズラ「ハア？」

トリカブト「十分でしょう。いやそれ以上です。町に住んでいて、国中の人間が知っている小説家ですよ。結婚相手として申し分がない」

スイカズラ「・・・申し訳ないですが、私には婚約者がいるんです」

トリカブト「も、めちやくちやいい女ですよ」

スイカズラ「・・・」

トリカブト「正直、会ったらイチコロですよ」

スイカズラ「・・・」

トリカブト「どこにいくんですか？」

スイカズラ「今の話、もう少し聞きたいなと思って」

トリカブト「はい、ぜひ。我が家へお越しください」

スイカズラ「そうではなくて、さっきの、若い女が殺された話です」

トリカブト「そんな話？」

スイカズラ「そうだ、一つ聞いておきたいんですけど、この話の中であなたはどこに出てくるんですか？」

トリカブト「それをお知りになりたいのであれば、ぜひ我が家へ」

スイカズラ「わかりました。ネリネが起きたら、夜には戻るとお伝えください」

トリカブト「先生」

スイカズラ「よかったらそれ、食べてください」

トリカブト「先生！」

スイカズラは隣村へ行ってしまふ。

## 19 欺瞞

旅館のテラス。

ネリネがスイカズラの座っていた椅子に座る。トリカブトが振り返るとネリネがいる。

トリカブト「先生は、取材に行かれました」

ネリネ「聞いてました」

トリカブト「あ、そうでしたか」

ネリネ「ええ」

トリカブト「ああ、よかったあいやあしかしおかげさまで復讐が一件、片付きました、ご協力、本当にありがとうございます！」

ネリネ「協力？」

トリカブト「あの御老人のお孫さん、ほんま長いこと隠れてたんですよ。恥も外聞も捨てて逃げ回ってね。ああいうやつがおると復讐が全然捗らへんいうてもう私、えらい怒られてたんです、昨日会ったでしょ、あの、目つきの悪いおっさん。はーこれでなんとか半年間連続0件のハンコを

額に押されずに済みました。いやー助かった。本当に助かりました」

トリカブトは握手を求めるがネリネは手を出さない。

ネリネ「復讐が実行されると、どうなるんですか」

トリカブト「というと？」

ネリネ「誰にどんな、メリットがあるんでしょうか」

トリカブト「(笑って)メリット」

ネリネ「・・・」

トリカブト「しきたりは、我々のここにありません」

トリカブトは額に指を当てる。

トリカブト「しきたりが、我々に分別を与え、正しさを思い出させるのです」

ネリネ「正しさ？人を殺すことが正しいことだっていうんですか？」

トリカブト「ネリネさん・・・人間を、人間たらしめているものはなんやとお考えですか？」

ネリネ「え？」

トリカブト「例えば死への恐怖は動物の本能です。あなたはあるほど、自分が動物であることを恥ずかしいとは思っておられないようですね」

ネリネ「・・・」

トリカブト「この山に住まうものは、復讐し、また復讐されることによって初めて人間であると認められます。復讐

にかかる税が何よりも大きいことが、それを証明しています」

ネリネ「結局お金なんじゃないですか」

トリカブト「そう思いたいならそう思えばいい。あなたがどう思おうと、この山には関係のないことですから」

ネリネ「・・・」

トリカブト「ところでどうしてあなたは先生とお付き合いされてるんですか？やっぱり将来の安定を見越して」

ネリネ「そんなこと考えてない！」

トリカブト「・・・」

ネリネ「ごめんなさい、大きな声出しちゃって」

トリカブト「・・・」

ネリネ「とにかく、私はそんなつもりであの人と結婚するんじゃないですね。私たちの間にはちゃんと」

トリカブト「愛がある」

ネリネ「・・・」

トリカブト「いや、失礼。なるほど、あなたは二人の間にそれがあるんだと、確信されているわけですね」

ネリネ「・・・」

トリカブト「あのおばあさんもおそらく、その愛とやらを信じておられたんでしょうな。それを捧げる相手がいなくなってしまうと・・・いよいよあっちへ行ってしまうわれませんでした」

ネリネ「え？」

トリカブト「話を通じなくなってしまうんだそうです、何を聞いても、ぶつぶつ独言を言うばかりで」

ネリネ「教えてください、あの方の家がどこにあるのか」

トリカブト「どうされるおつもりですか」

ネリネ「謝りに行きます。謝ったってお孫さんは戻っては来ないけど」

トリカブト「山の人間のしかばねを踏みつけて？」

ネリネ「・・・」

トリカブト「あの人と結婚するっていうのはそういうことです」

ネリネ「どういうこと？」

トリカブト「つまりあなたたちがここにとどまる限り、人は死に続けるということですよ」

ネリネ「どうして？」

トリカブト「・・・」

ネリネ「私があの人を殺したって言うんですか？」

トリカブト「・・・」

ネリネ「あなたさっきから、なんなんですか？私が一体何をしたって言うの。そりゃ、取材についてきたのは確かです。でも、さっきあなた言いましたよね。私がどう思おうと、山には関係がないって、私如きの行動一つで、一体何が変わるって言うんですか。大体、他にもたくさんいるんじゃないでしょう？町からやってくる人間は。私たちだけじゃないはずですよ」

トリカブト「動機は時を超えてやってきます。そして空っぽの人間に棲みついて操る」

ネリネ「・・・」

トリカブト「例えばあなたのような」

ネリネ「・・・」

トリカブト「それにしても、先生の婚約者やう言うから  
どれだけ上品な方かと思つたら・・・」

ネリネは部屋に戻り、息を深く吸いて、はく。  
たぐさんの透き間から、呼吸音が聞こえてくる。

## 20 夫婦の絆

旅館のテラス。

夜。取材から戻ったスイカズラ。しかし部屋に入らず、テラスを何か書き物をしている。そこに現れるネリネ。

ネリネ「お帰りなさい」

スイカズラ「うん、ただいま」

ネリネ「まだ書いてるの」

スイカズラ「うん」

ネリネ「晩ご飯は？」

スイカズラ「うん」

ネリネ「どうだった？何かいい話は聞いた？」

スイカズラ「うん」

ネリネ「・・・どんな話？」

スイカズラ「・・・」

ネリネ「部屋がちょっと寒くて。暖めたいんだけど、旅館の人に言ってもいいかな、このままだと、二人とも寒くて

眠れないかもしれない」

スイカズラ「・・・」

ネリネ「ねえ・・・私のせいなのかな」

スイカズラ「・・・」

ネリネ「あのお孫さん、私のせいで死んだのかな」

スイカズラ「・・・」

ネリネ「ねえ、私なんて連れて来なけりゃよかった？」

スイカズラ「・・・」

ネリネは部屋に戻る。

スイカズラ「ね、これが終わったら一緒に、ご飯を食べに行こう。いいレストランを見つけたんだ。ネリネがとっても喜びそうなところ」

スイカズラが振り返るとネリネはもういない。

## 21 失踪

旅館の前。

翌朝。トリカブトがやってくる。

トリカブト「おはようございます！」

スイカズラ「ネリネを見ませんでしたか？」

トリカブト「ネリネさん？いいえ？」

スイカズラ「部屋に、いないんです。荷物ごと」

スイカズラはネリネを探し始める。

道を歩く人に聞いて歩くが、すれ違うひとは皆、死んだような顔をしている。スイカズラは必死にネリネを探すが、どこにもいない。

## 22 荒屋

キクの家。

ネリネがいる。キクは、まるで誰かがそばにいるかのよう  
に、一人で喋り続けている。ネリネが話しかけても、音には  
反応するが、すぐに元の誰かへの語り掛けへと戻ってしま  
う。

キク「あんたのな、足が、大きくなってしまったやろ？せや  
からもっぺん、縫い直そうと思って。え？靴下やん。う  
ん。冬場のブーツの中に履く靴下。分厚い生地じゃない  
と、指の先がおかしくなるやろ？わかってるよ、もう春や  
ろ、せやけど今やっとかんと、また秋口になってから欲し  
い言われても間に合わへんかったらあかんやろ・・・」

ネリネ「お邪魔します」

キク「・・・生まれたときはこーんな足やったのに、気付  
いたらもう、私の両手を合わせたより、大きくなってしま  
って・・・ほんまにここから出てきたんかなあって思っ  
てるうちに、背まで伸びて、ぐんぐん伸びて、雲の上まで行  
ってしまった。戻っといで。ほら、そんなところおったら、  
あんた、寒いやろ・・・そこは・・・誰？」

ネリネ「あ、すいません、私、昨日、一緒に回覧板を」

キク「ちよ、お父さん呼んできて、晩ご飯やでって。あの  
人いっつもそうや、日暮れたら帰ってきてや、言うてんの  
に、真っ暗になるまで仕事して」

ネリネ「昨日は本当に、すいませんでした。私が、余計な  
ことをしちゃったから」

キク「え？・・・ああ、今日はお父さんの好きなクリーム  
シチューやでって言うたら？・・・うん」

ネリネ「・・・」

キク「にんじんは小さく切った・・・大丈夫、食べれるか  
ら・・・（すぐく面白そうに笑って）ほんまやな、にんじ  
んなんか食べんでも、あんたは大きくなったわ。ほんま  
や」

キクの家の窓ガラスが割れる。

石が投げ込まれたようだ。何度も何度も石が入ってくる。

映像・・・出ていけ！人殺し！お前のせいだ！よそ者！

ネリネが窓によると石が止む。キクは石を拾う。

ネリネ「しばらくここにいてもいいですか？」

## 23 発見

キクの家。

ドアが開いて、スイカズラがキクの家に入ってくる。

スイカズラ「ネリネ・・・帰ろう」

ネリネ「・・・」

スイカズラ「ここはダメだよ。空気が悪い、体を悪くして  
しまう」

ネリネ「・・・」

スイカズラ「それに僕たちはこの村には歓迎されていな  
い」

ネリネは首を振る。

スイカズラ「どうした？」

ネリネ「ここが家だとおもって戻ってくるかもしれないから」

スイカズラ「誰が？」

ネリネ「・・・」

スイカズラ「ネリネ？」

ネリネ「私が」

スイカズラ「・・・え？」

ネリネ「暗いでしょうここ。カビ臭いでしょう、すごく。似てるの、私の家に。私が生まれ育った場所に」

スイカズラ「・・・」

ネリネ「子供の頃、母と二人だった頃、いつも暗い場所にした、私、独り、裸足で、暗闇に光るやかん、カビに侵食されたみかん、とろみのついた古い麦茶、いつからここにあるっけ 違ったっけ 私はそれを見ながら、カルキくさい水道水を飲む 暗闇に光るやかん 今にも噴火しそうな火山 だけどそれはいつも不発で 足から登ってくる無情な冷気に 慌てて靴下を履くみたいに 穴から顔を出した小指 この小指の健気さ お前だけはその思い出 なかったことにしないでおくれ 私の思いを押し付けて」

## 第二幕一場

### 1 血の管理官3

避難の塔。

ザクロ「土地には、意思がある。そこに住まうものを、地獄の果てまで縛り付ける意思や、そのためにそこが、他より優れている必要はない、持たせればいい、父を、母を、愛する家族とその家を、自分のものだと思わせればいい、そうすれば誰も手放さなくなる。手に入ったものはいつも最上のもので、失ったものはいつも唯一無二のもの、それが例え道端に落ちた、名もなき歪な石であっても、手の中にあるものがいつも本質的なもの、だからしがみつくと、離さなくなる、命よりも愛おしい、この誉高い自分の手に」

トリカブト「お願いします、娘を返してください」

ザクロ「・・・」

トリカブト「娘の代わりに私が命を捧げます。お願いします、娘には、未来があるんです。私にはない、未来が」

ザクロ「例えばこんな未来はどうでしょう」

トリカブト「・・・」

ザクロ「池で浮かんでるんです。気持ちいいですよ・・・手足を切られて、だるまになった身体で、ぷかぷかと」

トリカブト「やめてください」

ザクロ「あるいはこんな未来はどうでしょう。あなたもこの間自分の村の人間にやったそうじゃないですか。人間松明。娘さんを松明にしてあなたの村を燃やす。そしたら娘

さんは、あなたの姿を見なくて済みます。しきたりを忘れた動物のような、恥知らずなあなたを」

トリカブト「私が松明になります！私が松明になって、村を焼きます！だから・・・娘だけは・・・娘だけはなんとか・・・」

ザクロ「（深いため息をついて）村長までやった人間が、娘のために村を捨てる・・・世も末ですなえ・・・」

間

ザクロ「あっ！先生の家に送り込んではどうでしょう？」

トリカブト「？」

ザクロ「あなたの娘です。娘を、嫁入りさせるんです、嫁入り道具を持たせて強引に。そしたらあの女は、慌てて町へ帰る」

トリカブト「え、そんな、いいんですか？」

ザクロ「しかし問題三つあります。一つは、あなたの娘が追い返されてしまわないかと言うこと。先生がああなたの娘を気にいるとは限りません。二つ目は、あの女が、先生に捨てられることでさらにこの山に執着する可能性があると言うことです。そして三つ目。村の女が、町に嫁ぐなどあってはならないことです」

トリカブト「娘は、山の人間と結婚させると決めております！」

ザクロ「役者ですなえ」

ザクロ「まあそこは、既成事実を作ることが目的ですから」



トリカブト「既成事実」

ザク口「結婚が無理でも、家に泊まったと言う事実があればいい。その事実をあの女に突きつけてやってください。それであの女がこの山を去らなければ、その時は……」  
トリカブト「娘は必ず、先生の心を手に入れます」

## 2 連鎖を断つ

キクの家の中で家事をするネリネ。キクは窓の外をぼうつと見ながら、相変わらず独り言を話している。

キク「あんたのな、足が、大きくなってしまったやろ？せやからもっぺん、縫い直そうと思つて。え？靴下やん。うん。冬場のブーツの中に履く靴下。分厚い生地じゃないと、指の先がおかしくなるやろ？わかってるよ、まだ夏やろ、せやけど今やっとかんと、また秋口になってから欲しい言われても間に合わへんかったらあかんやろ……」

ドアをノックする音。ネリネはドアを見る。

キク「……生まれたときはこーんな足やったのに、気付いたらもう、私の両手を合わせたより、大きくなってしまつて……ほんまにここから出てきたんかなあつて思つてるうちに、背まで伸びて、ぐんぐん伸びて、雲の上まで行つてしまつた。戻つといで。ほら、そんなところおつたら、あんた、寒いやろ……そこは……」

ネリネはドアの前に立つが開けることができない。

キク「誰？」

ネリネ「……」

キク「お客様は神様や」

ネリネはドアを開ける。そこにはリュウカにそっくりの村人が立っている。

キク「ちよ、お父さん呼んできて、晩ご飯やでつて。あの人がいつもそうや、日暮れたら帰つてきてや、言うてんのに、真っ暗になるまで仕事して」

村人「復讐を止めたいんです」

キク「え？……ああ、今日はお父さんの好きなクリームシチューやでつて言うたら？……うん」

村人「次に、うちの家族が殺されたら、一族が途絶えてしまいます。なんとか、この復讐を、止めて欲しいんです」

ネリネ「……ごめんなさい、私にはどうしたらいいの……」

キク「血の買い戻しの章」

ネリネ「え？」

村人はそばにあったしきたりの本をネリネに渡す。

ネリネは恐る恐る本を開く。

ネリネ「これ、ここですか、血の買い戻しについて」

キク「にんじんは小さく切つた……大丈夫、食べれるから……（すごく面白そうに笑つて）ほんまやな、にんじ

「なんなか食べんでも、あんたは大きくなったわ。ほんまや」

村人「村の人間は、字が読めないんです」

ネリネ「え？でもじゃあ、この本は」

村人「それはお守りみたいなもんです。しきたりは、我々のここにありません。我々の間に受け継がれてきた言い伝えを、どこかの偉い人が文字にしてくれたんです」

ネリネ「・・・」

村人「お願いします。そこになんて書いてあるのか、教えてください。村人に、説明して欲しいんです」

ネリネ「あの・・・（何かを聞こうとするが諦めて首を振り）わかりました」

ネリネは村人とともに外にでて、村中の人にしきたりの本を読み聞かせ、血の買い戻しの章の存在を知らしめる。

村人たちがネリネを受け入れる。

### 3 無意識の再会2

キクの荒屋。その夜。

心地よい疲れの中で、ふとリュウカのこと、ネリネの頭をかすめる。リュウカの思いと、ネリネの思いが、重なる。身体的には重ならないが、空で調和している。

ネリネ「思わぬ形であの人と再会した私は、けれどそのことを確かめるすべを持ちませんでした。なんて聞けばいい？」

ネリネ「この窓の向こうの星の瞬き 教えてくれたあなたは今 空に彷徨い 雲に飛び乗り 地球持ち上げ 大地を蹴った あなたは踊り 私は歌い 風が吹いたら その風に乗った あなたはいつも 私の手を握り 蒼く染まった月に腰を掛けて  
ねえ、どこ、あなたはどこ、ここじゃない、私の帰る場所  
ねえ、どこ、私はどこ、ここじゃない、あなたと会える場所、ねえ、どこ」

### 4 お前の思う俺

町のマンションの一室。

朝。自室で目覚めるスイカズラ。

電話が鳴り、出る。

スイカズラ「もしもし・・・ああ、私です・・・はい・・・はい、戻りました。え？・・・ああ、一人で・・・ちよつと、事情があつて・・・え？新聞？（と新聞を開く）そんなニュースになるほどのことじゃないですよ？ただちよつと、意見が合わなくて・・・すぐに帰ってきます、そのうちすぐ、帰ってきたら結婚式を挙げるつもりです」

電話を切るがまたかかってくる。

スイカズラ「もしもし・・・ああ、悪いけどまた電話する。え？ああ、今ちよつと締め切りが近くて・・・」

え？・・・いやだから締め切り・・・それは葛切り・・・うん、私が言ってるのは締め切り・・・え？やだからそれは葛切りですよ、鍋に入れるやつでしょう？え？いつ帰ってくるかってそんなのわからないよ！」

ドアを叩く音。

スイカズラ「(ドアの向こうに) どちら様ですか？」  
ドアの向こうの人「俺だよ俺！」

スイカズラがドアを開ける。そこには友人たちが立っている。

友人1「お前大丈夫？奥さん、旅行先において帰ってきたんだって？」

スイカズラ「どちら様ですか？」

友人2「俺だよ俺！」

友人3「俺！」

友人1「俺！」

スイカズラはドアを閉めようとする。

友人2「待てよ！」

スイカズラ「？」

友人3「俺だよ俺」

スイカズラ「え？」

友人1「俺だよ俺」

スイカズラ「え、えっと・・・」

友人2「俺だよ俺！」

スイカズラ「誰？」

友人3「俺！」

スイカズラ「すいません本当に誰だかわからないんです」

友人1「安心しろ、俺はお前の想像する俺じゃない」

スイカズラ「え？」

友人2「俺は俺だ」

友人3「お前が俺だと思っているのは、お前が想像している俺であって俺ではなく」

友人1「俺が考えていることはお前にはわからないし、分かる必要もないんだ」

スイカズラ「ちよっと・・・本当に何言ってるかわからないんですけど」

友人1「俺だよ俺」

友人2「俺だよ俺」

友人3「俺だよ俺」

友人たち笑う。

友人1「俺だよ俺」

友人2「俺だよ俺」

友人3「俺だよ俺」

友人たち笑う。友人たちは、写真を撮りまくる。友人たちはベッドの中に滑り込む。

スイカズラ「うわあ！あなた、誰ですか！？・・・すいません。昨日のことを全く覚えてなくて。ちょっと聞いてもいいですか。なぜあなたがそこに寝ているのか。何より知りたいのは、あなたが一体、誰なのかと言うことです・・・生まれてこの方、意識がなくなるほど、飲んだことがなかったもので・・・あの、それでしたら申し訳ないんですけど、出て行ってくれませんか。一人になりたいんです。頼みます、頼みますから、私を一人にしてください・・・」

トリカブトの娘「私と一緒に写真を撮ってください」

スイカズラ「え？」

トリカブトの娘「私、好きな人がいるんです」

トリカブトの娘「今頃この町に向かっているはずなんです、うまく、山を出ることができていたら」

スイカズラ「あなたもしかして・・・」

トリカブトの娘「・・・」

スイカズラ「どうして・・・」

トリカブトの娘「・・・」

スイカズラ「好きな人がいるのにどうして？」

スイカズラはトリカブトの娘とベッドの上で写真を撮られる。笑い声。

スイカズラ「私は川辺に立って いる 静寂 私の足の親

指は 水と 空気の結界あたりをなぞ っ て いる 近く  
に人が いる ようだ 集まるのが好きな人たち 笑い声  
が 遠くで聞こえる すべての人がその人生 を 心から  
楽しんで いるように思える 私 は それを壊したくな  
る この 親 指 で すべての人がその人生を、楽しん  
でいるように思える。私はそれを壊したくなる、この親指  
で、勢いよく結界を破って」

スイカズラ「僕はいったい今まで、何を頼りに生きてきたんだ」

## 5 存在を脅かす女

トリカブトの家。  
トリカブトの元に村人が街からの写真を届ける。  
トリカブトは写真を確認する。

トリカブト「(写真を見て) あいつ、ほんまようやってくれた、この村のほまれや、俺の娘が身一つでこの村を守ったんや。(大きなため息をついて) とうとうあいつも嫁入りかあ・・・(目の端を指で拭いて) それにしてもあのおっさん、なんであんな女一人にごちゃごちゃごちや言うてくるんやろほんま、なあ、思わへん？」

村人「・・・」

トリカブト「俺の娘を人質にまで取って・・・一時はどうなることかと思って気イ揉みすぎて毎晩毎晩あのおっさんが夢に出てきたわ・・・夢の中であいつ、墓の前で泣いてるねん、ママ、ママ、言うて・・・ああ！もしかしてあ

つ、あの女に惚れてるんちゃうか、とか言って……ふふふ」

村人「……」

トリカブト「笑えよ……俺がまるで一人で悪口言うてるみたいやんか……でもワンチャンありえるで、あのおっさんの母親、えらい自己主張激しかったって言うから……覚えてる？去年、焼き払いにあった村。そこに住んでたんやって、年寄り一人で、ことあるごとに自慢してたけど息子のこと、最期は息子の命令で殺されるっで……ほんまに、どうかしてるで、この山は」

ザクロがやってくる。

トリカブト「あー邪魔くせ。今からこれを管理官のところに届けに行かなあかんのか、いややねんな、俺、避難の塔に行くの。あっこ行ったらいつも誰かが怒鳴られてんねん……そうそう、こないだは管理官が詰められてたわ。お前の代わりはいくらでもいるんじゃないって」

ザクロ「あなたもそう思ってるんですか」

トリカブト「はっ（と立ち上がり）わざわざ、いらしてくださったんですか……こんな……ところまで」

ザクロ「ちょっと用事がありました」

トリカブト「……というと」

ザクロ「今し方、血の買い戻しの餐が執り行われた村があるそうです」

映像……血の買い戻しの餐

トリカブト「チノカイモドシノサン……どこの村ですか、そんな、誰も知らんようなしきたりを持ち出してくるなんて」

ザクロ「あの女が住む村です。しきたりの書を読みあげたそうです。あの女が」

トリカブト「で、その、チノカイモドシというのは」

ザクロ「復讐をやめる儀式です。このまま二つの家同士が血の一滴を交わせば、復讐が一件、無くなってしまいます」

## 6 儀式

村のある家。

ネリネは両家の家族の全員を説得し終え、いよいよこの連鎖を断つ儀式が始まる。

映像「血の影を追い出す儀式」

村人たちが、足踏みで、血の影を追い出す儀式が始まる。足踏みの音がどんどんと大きくなる。ところが突然、誰かが叫ぶ。

映像「あかん！」

足音が止む。

村人たちは声のする方を探すが、どこにもその声の主はいない。

映像「血は続行や！」

村びとたちは解散する。ネリネは一人、残される。

## 7 挑発

避難の塔。

すっかり萎縮したトリカブトと、憤りを隠すザクロ。  
一方ネリネはしきたりの本をまた読み始める。

ザクロ「あの女が、最初にこの山にやってきたときのことです。トイレに行くと言って立ち去った女は、用を済ませたあと、川辺に一人、座り込んでいました」  
トリカブト「はあ」

ザクロ「何をしていたと思いますか。女は、本を読んでいたんです。風景を愛でるでもなく、物思いにふけるでもなく、本を」

トリカブト「でも・・・とても本が読めるようには思えなかったです」

ザクロ「ああやってたぶらかすんですよ、魔女は、人を。あなたもすっかり騙された。それでこの始末です」

ザクロは小さな瓶を、テーブルに置く。

ザクロ「花嫁が、嫁入りするときを持たされるものです」

トリカブト「・・・」

ザクロ「あの女に飲ませてください」

トリカブト「それは・・・しきたりで禁じられていることです。客人の命を・・・奪うなんて・・・」

ザクロ「あなたも破ってきたじゃないですか、ずっと」

トリカブト「・・・」

ザクロ「今日中にお願ひします。必ず、今日、日付が変わるまでに」

トリカブト「・・・」

ザクロ「そういえば、あなたの娘さんに恋人がいることは、ご存知でしたか」

トリカブト「え？」

ザクロ「その様子やと、今初めて知ったようですね」

トリカブト「・・・」

ザクロ「山を出ようとしていたので、捕まえました。ちょっと調べたのですが、その男は、土地争いのために人を殺しているようです。安心しました。一人で死ぬのは怖いだろうと思っていたので。あなたの娘さんが」

トリカブトはザクロの持って来た瓶を手にする。

ネリネ「私はあの人の・・・いえ、あの人に似た村人の願いを、叶えることができませんでした。突然現れた村人が邪魔をしたのです、その村人は、私がこの村に来た当初、一度だけあったあの男に似ていました」

一方ザクロは避難の塔から、廃村に向けて歩き始める。

## 8 俺の思うお前

山のどこかにある廃村。

ザクロが誰かに喋っているように見えるが、だんだんと道端に咲いた白い花に向かった独言であることがわかり始める。

ザクロ「あなたの好きな季節になりましたね。北風が、大地をかすめて吹き抜けていく。それについて、足を取られてここまでできてしまいました・・・え？・・・ああ、わかりますか？そうなんですよ、最近、食べ物喉を通りません。いや、何もありませんよ・・・何もありません。ただ、必要のない欲がまた一つ、減ったというだけの話です。大丈夫、安心してください。王家は私のことを信頼しています。私なしでは血の管理はできないと、このあいだも言われたところです。私はこの山を、誰よりも誇りに思っているんですから。今日は、一つ、気になることがあって。ここに来れば何か思いつくかもしれないと思って来たんです。子供の私に、しきたりの本を読んでくれたのは、あれはいつたい、誰でしたか？この山には今も、僧侶以外に文字を読めるものはおりません。けれど私の脳裏には、本を持つあなたの姿がこびりついているのです。本当に？本当にあれば、あなたではありませんでしたか？ママ」

## 9 痛み止め

キクの家。しきたりの本を読み耽るネリネ。

キク「あんなのな、足が、大きくなってしまったやろ？せやからもっぺん、縫い直そうと思って。え？靴下やん。う

ん。冬場のブーツの中に履く靴下。分厚い生地じゃないと、指の先がおかしくなるやろ？わかってるよ、まだ秋やろ、せやけど今やっとかんと、冬になってから欲しい言われても間に合わへんかったらあかんやろ・・・」

そこにトリカブトがやってくる。トリカブトは手作りの酒を持っていて。トリカブトは、何か自分では扱いきれない大きさの任務を背負っているかのように、自らも酒を煽ってやってきた感じがある。トリカブトは早速、勝手にコップを2つ用意し、酒を継ぎ始める。

トリカブト「昨日は残念でしたねえ・・・せっかくしきたりを覆せるかもしれへんかったのに」

ネリネ「何か御用ですか」

トリカブト「いや労おうと思って。誰にもできなかったことを、成し遂げようとしたオエ・・・すいません、成し遂げようとされたのは、本当に、ちょっと、トイレを」

ネリネ「こっちはです」

トリカブト「あの後すぐに復讐は実行されました」

トリカブト「あなたに相談しにきた男ですよ。立派に、銃弾に倒れてウツ」

トリカブトはトイレに行く。

キク「・・・生まれたときはこーんな足やったのに、気付いたらもう、私の両手を合わせたより、大きくなってしま

って・・・ほんまにここら出てきたんかなあって思ってるうちに、背まで伸びて、ぐんぐん伸びて、雲の上まで行ってしまった。戻っといで。ほら、そんなところおったら、あんた、寒いやろ・・・そこは・・・」

トリカブトが戻ってくる。

キク「誰？」

ネリネ「大丈夫ですか？」

ネリネはトリカブトが椅子に座るのを手伝う。

キク「ちよ、お父さん呼んできて、晩ご飯やでって。あの人いっつもそうや、日暮れたら帰ってきてや、言うてんのに、真っ暗になるまで仕事して」

ネリネ「あの人、死んだんですか」

トリカブト「え？あの人って？」

ネリネ「いえ・・・」

キク「え？・・・ああ、今日はお父さんの好きなクリームシチューやでって言うたら？・・・うん」

トリカブト「山のために、一生懸命働いてくれるお客様に、乾杯」

ネリネ「・・・」

トリカブト「どうぞ、飲んでください」

ネリネ「飲めないんです、私」

トリカブト「ああ」

ネリネ「あなたもそうでしょ」

トリカブト「いいんですよ私のことは」

ネリネ「やめてください。死にますよ、これ以上飲んだら」

トリカブト「私のことを心配してる場合ですか」

ネリネ「え？」

トリカブト「旦那さんを一人、町に帰らせて、心配じゃないんですか」

ネリネ「町にはしきたりはありませんから」

トリカブト「え？」

ネリネ「誰かに殺される心配はないということです」

トリカブト「でも、町にはいい女がいっぱいいます」

ネリネ「・・・」

トリカブト「命はあっても、心がどっか行ってしまってもしれへん。愛っていうのはね、手に入るとえも言われぬ幸福感に包まれるんですが、切れると地獄に突き落とされるという性質を持っています。例えば、こんな写真一枚で」

トリカブトは写真をネリネに差し出す。

ネリネはトリカブトの用意した酒を見る。

トリカブト「この写真を見た時、私はえも言われぬ幸福感に包まれました。娘をやっと都会に逃がせる。もう死んでもいい。そう、思いました。それだけ、愛してたんです私、自分の、娘を」

ネリネはコップを持つ。



キク「飲んだらあかん、にんじんが入ってる」  
ネリネ「・・・」

キク「そんなん飲んでも、あんたは大きくなれる。だから飲まんていい。にんじんが入ってるんやから、あんたの大嫌いなにんじんが」

トリカブト「いいですか。人間の中には人間でないものが潜り込んでいます。そいつが、混乱を招くんです。ところが我々人間にはその違いがわからない。だからこうやって、酒を煽って、その恐怖からひととき、心を逃すんです」

ネリネは酒を飲む。

## 10 悪魔と踊る

ネリネは倒れる。夢の中でネリネはたくさんの悪魔と代わる代わるダンスを踊っているが、いつの間にかリュウカが相手になっていく。ネリネは逃げようとするがリュウカはネリネの手を離さない。

## 11 暴露

キクの家。

ベッドで昏睡するネリネ。体は熱く熱を帯びている。

そのベッドの傍にたつスイカズラ。町からやってきたのだ。

キクは冷たい水につけたタオルを絞り、ネリネの身体を冷やす。

キク「まさかににんじんを食べるとは思わなんだ」

スイカズラ「え？」

キク「・・・」

スイカズラ「え、にんじんを食べて寝込んだんですか？」

キク「・・・子供の頃に散々、にんじん食べへんかったら大きくなれへんて言うて、そこまで言うても絶対食べへんかったこの子が」

スイカズラ「子供の頃？」

キク「へ？」

スイカズラ「へ？」

キク「ああ、だから言うたやろ？にんじん食べへんかったら大きくなれへんて言うて」

スイカズラ「・・・え・・・ごめんなさいちょっと、よく、わからないんですけど、ネリネは、なんで寝込んでい

るんでしょうか」

キク「毒を飲まれたんや」

スイカズラ「誰に？」

キク「あんたのな、足が、大きくなってしまったやろ？せやからもっぺん、縫い直そうと思って。え？靴下やん。うん。冬場のブーツの中に履く靴下。分厚い生地じゃないと、指の先がおかしくなるやろ？わかってるよ、もう春やろ、せやけど今やっとかんと、また秋口になってから欲しい言われても間に合わへんかったらあかんやろ・・・」

そこにトリカブトがやってくる。

トリカブト「先生！いらしてたんですか」

スイカズラ「ああ、よかった」

トリカブト「え？」  
スイカズラ「いや、仕事がひと段落つきましたので」  
トリカブト「それはそれは、お疲れ様です。あ、もしかして、結婚式のことですか？」  
スイカズラ「結婚式？」  
トリカブト「どうしましょう。山でやりますか、それとも町で」  
スイカズラ「・・・」  
トリカブト「いえ、もし町でやるということでしたら、私も親戚に声をかけて、旅の準備をしないとイケないものから」  
スイカズラ「娘さんの話ですか」  
トリカブト「はい。あ、すみません、相談しにきてくださったんですよね、わざわざ、こんなところまで」  
スイカズラ「違います」  
トリカブト「・・・」  
スイカズラ「あなたの娘さんには、恋人がいます」  
トリカブト「やめてください」  
スイカズラ「二人は、愛し合っているんです」  
トリカブト「その話はやめてください！」  
スイカズラ「・・・」  
トリカブト「すみません、もう、たくさんなんです、そんな、夢のような話は・・・」  
スイカズラ「夢じゃない、実際に私は本人から」  
トリカブト「明日の朝、その恋人は殺されます。土地争いのために人を殺した男は、しきたりに従い、自分の住む村

の人間全員から、石を投げられて殺されるんです。娘は利用されたんだと思います、その男に」

間

スイカズラ「ネリネがもう、何日も目を覚ましていないと。ご心配おかけしまして、申し訳ありません。一旦、連れて帰って、町の医者にも診てもらおうことにします」  
トリカブト「この山にも医者はいますよ」  
スイカズラ「ここでは無理です。この山の医者では」  
トリカブト「それは先生、山をばかにしすぎですよ。安心してください。一度町に出て、学校で学んで山に戻った医者がいるんです」  
スイカズラ「その人とあなたは、仲がいいんでしょう」  
トリカブト「ええ、呼べばすぐにきてくれます」  
スイカズラ「そうすると本当のことは闇に葬られてしまいますね。誰に頼まれたのか。いったい誰が、ネリネに毒を飲ませるように言ったのか」  
トリカブト「・・・」  
スイカズラ「それともこれはあなたの考えですか」  
トリカブト「私じゃない・・・私は・・・そんなこと、絶対にしたくなかったんです」

## 二場

### 12 友情

キクの家別室。

トリカブト「申し訳ない」

スイカズラ「謝るなら、ネリネに謝ってください」

トリカブト「ただ、どうしても、全てを飲ませる勇気が出なくて・・・」

スイカズラ「じゃあ」

トリカブト「半分は、捨てました」

スイカズラ「だからネリネは、まだ生きているのか」

トリカブト「・・・」

スイカズラ「客人は神聖なものだとしきたりの本に書いてありました、その命は何があっても守られるのだと・・・それを管理官は破ったのですね」

トリカブト「・・・一つお願いがあります」

スイカズラ「？」

トリカブト「死んだことにしてくれませんか」

スイカズラ「え？」

トリカブト「生きていたことがわかると、娘が、殺されてしまうんです」

スイカズラ「どうして？」

トリカブト「・・・」

スイカズラ「もしかしてあなたは、娘さんの命と引き換えに」

トリカブト「お願いします。管理官には私から報告しておきます。先生は夜の間に、ネリネさんを町まで連れて帰ってください」

スイカズラ「私を避難の塔まで送ってください。管理官と話がしたい」

トリカブト「やめた方がいい」

スイカズラ「納得ができない。しきたりを軽んじているのは管理官ではないですか」

トリカブト「管理官は危険です」

スイカズラ「だから会うんですよ。会って、抗議するんです」

トリカブト「抗議して、どうなるんですか。ネリネさんを殺したのはお前だと言うんですか」

スイカズラ「・・・」

トリカブト「私は処分を受けるでしょう。しきたりを破り、毒を持ったのは私ですから。管理官は山を代表してあなたに謝罪し、王は哀悼の意を表すでしょう。でもそれで終わりです。何も変わらない。何も、変わりません」

スイカズラ「じゃあこのまま、人が死んでいくのをただ見ているというのですか」

トリカブト「ネリネさんは、まだ、助かる可能性が」

スイカズラ「ネリネのことではありません。この山の人々。復讐の掟に絡み取られた人たちのことを言っているのです」

トリカブト「・・・」

スイカズラ「あなたのことは私が守ります。あなたの娘さんも。勇気を出してください。私が何も言わなければ、あなたとの地位は守られるかもしれない。でも復讐の掟は無くならない。統治する人間が守っていないしきたりによって、明日からもまた、人が死んでいくんです」

トリカブト「違う。先生は勘違いしてる」

スイカズラ「え？」

トリカブト「いいんですよ私は、自分がどうなっても。だけれどそれで山は変わるんですか？と聞いてるんです」

スイカズラ「・・・」

トリカブト「山を変えるとおっしゃるなら、その方法を教えてください。確実に具体的な方法を」

スイカズラ「・・・」

トリカブト「ね。出てこない。山は、あなたの正義感を満たすためにあるんじゃないんです・・・私はね、もう随分前から、生きてる意味がわからないんです。この山の人間はみんなそうです。生まれた瞬間から、銃弾に倒れることを望まれるんですから。ただ、娘は・・・娘のことだけは、どうしても諦めきれないんです」

スイカズラ「わかりました。真実を、小説にします」

トリカブト「・・・」

スイカズラ「この山の真実をありのまま、描きます。私が書けば、世間の興味をひいて、山が今のままではいられない状況を作ることができるはずです」

トリカブト「先生」

スイカズラ「うん、それならできる」

トリカブト「・・・」

スイカズラ「それなら、私にもできます。だから私を、避難の塔に連れて行ってください」

トリカブト「私はあなたを尊敬します。命を賭して権力に立ち向かう、それでこそ国一番の小説家です」

スイカズラ「・・・」

トリカブト「ではすぐに、避難の塔までお送りします」

### 13 真つ青な顔

眠るネリネを乗せたトリカブトの車に乗って外を見つめるスイカズラ。

スイカズラ「初めてここに来たときのことを思い出します。あなたの運転する車に、ネリネと乗って、この山をドライブした。あのときの私は、浮かれていた。新しい小説のことで、頭がいっぱいだった」

トリカブト「羨ましい」

スイカズラ「・・・」

トリカブト「人間が悩むのは、いつも人間のことです。私がかもし文字を読めたなら、先生のように物語を作り、その世界に閉じこもるでしょう。そうすれば誰とも、付き合わなくて済む」

スイカズラ「そうはいかないですよ」

トリカブト「え？」

スイカズラ「物語の世界に時間はありません。切り落とされた一握の日々を、人は生きることができないんです」

トリカブト「・・・」

スイカズラ「物語は一瞬。ひととき、手を握ってくれるだけですよ」

スイカズラがふと車の外を見ると、村を歩くりユウカが見える。

スイカズラ「あれは」

トリカブト「ああ、黒いリボンをつけている。人を殺した男ですね」

スイカズラ「あの人を、見た気がするんです。あなたの家の、二階の窓から」

トリカブト「ほう、となると、そろそろ猶予が切れる頃です」

スイカズラは車を降りて、リュウカに向き合う。

スイカズラ「私は小説家です。町からやってきました」

リュウカ「・・・」

スイカズラ「もしよかったら、乗って行きませんか。町に出て、私の取材に付き合ってください、この山のことを知りたいんです。当面のお金は工面します。町に出ればあなたも、死に怯えずにすむ」

リュウカは手足がバラバラになるかのように、踊る。

## 14 抗議

避難の塔。

ザクロ「いやあ先生が山にこられていたとは、知りませんでした・・・しかしこられて早々、山の秩序を乱すのは勘弁いただきたい」

スイカズラ「すいません、何がダメでした？」

ザクロ「復讐の時間にいる人間には、声をかけないでほしいのです」

スイカズラ「そうだ、これ」

ザクロ「・・・」

スイカズラ「一緒に飲みませんか」

ザクロ「綺麗な色のワインですね」

スイカズラ「お土産です」

ザクロ「・・・どうですか。小説の進み具合は」

スイカズラ「それが意外な方向に、話が進んでいるんです」

ザクロ「と言いますと？」

スイカズラ「復讐を奨励していた血の管理官の思惑とは裏腹に、村人たちは、そのしきたりから解放されようと考え始めるんです」

トリカブト「先生！」

スイカズラ「人々は気がついたんです。しきたりが、自分たちのためではなく、王のためであったことを。自分たちはまるで黒子のようにそこにいないものとして扱われ、山は王の、王の親戚の、そしてそこに群がるあなたのような管理官たちのものであるかのように演出されていたということに、気づいたんです。あなたたちもまた、自分以外のものに心を、身体を乗っ取られていたことを、この世に産声をあげた瞬間から、まるで操り人形のように生きてきたと言ったことを気づきます。まるでどこかの透き間から伸びてきた手に心を塗り取られてしまったかのように、空っぽで生きてきたと言ったことを、山に住む全ての人が気付くんです」

ザクロ「ははは、なかなか面白い。なるほど、王が主役で私たちが脇役、そして村人たちは黒子ですか・・・しかししきたりから解放されるとはどう言うことでしょう・・・死に怯えることもなくなるが、生きる意味も失われる。あまりに退屈なので、これまでしきたりによって殺されていた人々は、今度は自ら死を選ぶことになるでしょう、自殺者がしきたりによって死んだものの数を超えた時、あなたは、自分の思いつきがいかに本質からずれていたかということに気づくはずですよ」

スイカズラ「なぜそうなると言い切れるんですか」

ザクロ「この世界にある全ての現象は、原因ではない、結果だ」

スイカズラ「・・・」

ザクロ「これが恐れに屈した人々の、思い描いた世界なんです」

スイカズラ「だったら私が世界を変えて見せます」

トリカブト「先生」

スイカズラ「私がこの山の真実を描きます」

トリカブト「先生！」

ザクロ「村長・・・何をそんなに恐れてるんですか」

ザクロはグラスの中の液体を飲み干す。

ザクロ「最初にお会いした時に私、先生に言いましたね。自由に書いてくださいと。その気持ちは今も、変わっていません。ただし、背後には十分気をつけてください。塔には醜い一つ目巨人、ポリュペーモスが潜んでいますから」

スイカズラ「知っています」

ザクロ「・・・ああ、そうですか」

スイカズラ「ネリネがそいつに、毒を盛られたんです」

## 15 誓いを胸に取り戻せ

リュウカが山を歩いている。復讐の時間を生きている。

## 16 夜の闇に響く遠吠え

車の中のネリネが目覚ましリュウカを見つける。

ネリネ「あの人は彷徨い歩いている。死の知らせを、手の中、袖のうえ、翼の中に持って、近づくことのできない道を。あの人はきつと、こんな暗闇と創造の混沌に立ち向かう、空に漂う、大きくふくらみ、夜の闇に響く遠吠えのように」

## 17 行方不明の心

スイカズラがトリカブトとともに車に戻ってくる。

スイカズラ「ネリネ！」

トリカブト「ネリネさん！」

スイカズラ「よかった、生きてた！」

ネリネ「ストップストップストップ」

ネリネ「なんか色々混乱する」

スイカズラ「そうだよね」

ネリネ「まず、ここはどこ？」

スイカズラ「僕たちは今、町に帰るところだ。ここは避難の塔で、今、血の管理官のところに行ってきた。この山の真実を暴いてやるって言ってきた！この山は狂ってる、みんなを救わなきゃ、このしきたりをやめさせて、この山に、平和を取り戻さなきゃと思って。それでお願いがある。もう一度僕の取材についてきて欲しい。この山を回って、真実を書く手伝いをして欲しい」

ネリネ「村長さんは、何、一緒にお酒を、飲んでたんじゃなかったっけ、飲めないのにお酒を飲んで、それで、」

トリカブト「申し訳ない。悪いのは全部、私なんです」

スイカズラ「ネリネ。村長さんを許してあげてほしい。彼は、とても反省している」

ネリネ「そうね。昔の私なら、許したと思う」

スイカズラ「え？」

ネリネ「あなたの言うことを聞くことが、愛情表現だと思っただけだから」

スイカズラ「どういうこと？」

ネリネ「いいですよって。どうして謝っているのか、何を許せばいいのか考えもせずに笑顔で」

スイカズラ「・・・」

ネリネ「そうやって世界の解像度をどんどん下げて、あなたなしでは立つこともできない私になって」

スイカズラ「ネリネ・・・もういい。何も考えなくていい。帰ろう。町へ。ここで起きたことは全部忘れて、新しい生活を始めよう、僕と一緒に」

ネリネ「あなたの心は綺麗。どこまでも澄み切った山の水のように、覗き込めばそこに私が映るほどの、透明な心をしていると思っていた。あまりに美しいので、私は怯んでしまっただけ、私の本当の姿がそこに写ってしまうんじゃないかという恐怖でいっぱいになって、出会った頃はよく、あなたにいないところで一人泣いていた。

あなたのそばにいないと、私の空っぽでどす黒い伽藍堂が、目立ってしまうんじゃないかと思って。そしてあなたは私に乗り込んできた。私はあなたでいっぱいになって、あなたの思うように感じ、あなたの思うように喋ろうとした、だけど気がついたの。あなたが綺麗なのは、あなたがこれまで誰にも乗っ取られたことがなかったからだって」

スイカズラ「ネリネ」

ネリネ「私の心がどす黒いのは、誰かが土足で上がり込んできたからだったって・・・ほら・・・すぐそば、すぐそばまできている。透き間が口を開けて、私たちを飲み込もうとしている・・・あっち行って、あっちへ行っただけ！」

スイカズラ「ネリネ。透き間は僕が埋める。約束する」

スイカズラはネリネを抱きしめる。

## 18 死

銃声が聞こえ、スイカズラが倒れる。

銃を持った男が、立ち去る。叫ぶネリネを匿い辺りを見渡すトリカブト。二人はスイカズラを撃った誰から身を隠すように、その場から離れる。

## 19 キクの世界へ

キクの荒屋。

入り口の前に立つネリネとトリカブト。

トリカブト「すぐに戻ります。誰かが訪ねてきても、絶対にドアを開けないでください」

部屋の中には変わらずキクがいる。

ネリネ「あの人が死にました。目の前で、銃で撃たれて。あの人を、あの人の美しさを、私が責めたすぐ後に。あんなにひどい言葉で責めたのに、それでもあの人は誓ったんです。私の透き間を、僕が埋めるって」

キク「私の息子もせやった。何があっても会いにくるって誓ったせいで、毎日、来る」

ネリネ「え？」

黒子が登場する。

黒子「何してんの？」

キク「あんなのな、足が、大きくなってしまったやろ？せやからもっぺん、縫い直そうと思って」

黒子「何が」

キク「え？靴下やん」

黒子「靴下？」

キク「うん。冬場のブーツの中に履く靴下。分厚い生地じゃないと、指の先がおかしくなるやろ？」

黒子「お母ちゃん今何月かわかってる？」

キク「わかってるよ、もう冬やろ、せやけど今やっとかんと、また来年になってから欲しい言われても間に合わへんかったらあかんやろ……」

ネリネ「え……」

黒子「ありがと」

キク「……生まれたときはこーんな足やったのに、気付いたらもう、私の両手を合わせたより、大きくなってしまっ……ほんまにここから出てきたんかなあって思ってるうちに、背まで伸びて、ぐんぐん伸びて、雲の上まで行ってしまった」

黒子は高いところに登る。

キク「戻っといで。ほら、そんなところおったら、あんだ、寒いやろ……そこは……」

黒子2「あの」

キク「誰？」

黒子2「僕です、僕」

ネリネ「誰……」

キク「ちよ、お父さん呼んできて、晩ご飯やでって。あの人がいっつもそうや、日暮れたら帰ってきてきてや、言うてんのに、真っ暗になるまで仕事して」



黒子2 「だけど僕が呼びに行行って帰ってきたことなんか一回もないですよ」

キク「え?・・・ああ、今日はお父さんの好きなクリームシチューやでって言うたら?」

黒子2 「それやったら帰ってくるんかな」

キク「・・・うん」

黒子「クリームシチューいや」

キク「にんじんは小さく切った」

黒子「でも入ってるんやろ」

キク「大丈夫、食べれるから」

黒子「にんじんなんか食べんでも、俺めっちゃ大きくなったで」

キク「(すごく面白そうに笑って)ほんまやな、にんじんなんか食べんでも、あんたは大きくなったわ。ほんまや」

ネリネ「毎日来てたの? ねえ」

キク「え?」

ネリネ「この人たち。毎日ここに来てたの?」

キク「誓いは生死を超えてやってくる」

ネリネ「え?」

キク「行くで」

キクは黒子たちとまるで子供のよう遊ぶ。

キクに釣られネリネも一緒に遊ぶ。

ネリネ「おばあさん、あなた本当におばあさん?・・・」

透き間風が吹く。

映像…ここは、時間のない場所 太陽に見えるのは 潰れた花 切り落とされた一握の日々

キク「あれは透き間風。なんも怖がることあらへん。空っぽやから、よう鳴るねん。よう鳴るから、花が揺れる」  
ネリネ「花・・・?」

## 20 懺悔

キクの家。

トリカブトが入ってくる。黒子たち、消える。

トリカブト「裏に車を停めてあります、私が、あなたを町まで送ります」

ネリネ「・・・」

トリカブト「早く。夜の間山を降りないと」

ネリネ「・・・」

トリカブト「さあ!」

ネリネ「待ってください。私は車に乗りません」

トリカブト「ええ?」

ネリネ「・・・」

トリカブト「見たでしよう? 目の前で、撃たれたんです先生が。ここは危険です。今すぐ町に戻らないと」

ネリネ「(首を振る)」

ネリネ「わかってますか? あなた、毒を盛られたんですよ?」

ネリネ「あなたにね」

トリカブト「あっ」

ネリネ「だからあなたの用意した車になんて怖くて乗れません」

トリカブト「ほんまや・・ああ、ちくしょう、なんでそこまで頭が回らへんかったんやろう」

ネリネ「・・」

トリカブト「違うんです。本当に、私、本当にあなたを助けたいと思って・・」

トリカブトは項垂れる。

ネリネ「白い花が咲いているところを、知りませんか」

トリカブト「え？」

ネリネ「初めてここに来た時、摘んだんです。湖のそばで。あの花をもう一度、見たいんです」

間

トリカブト「わかりました」

ネリネ「・・」

トリカブト「行きましょう。私が車でお供します」

## 21 穿たれた空洞

花のさくところ。

管理職を追われたザクロが一人歩いている。どこからともなく石が投げられ続ける。

ザクロ「庭から声をかけずに人家に入ってはならない。私たちの間では男らしいこと以外話してはならない。土地争いのために人を殺してはならない。陰口を叩いてはならない。思ったことは最後まで言わなくてはならない。屈辱を逃れる道は掟の中にしかない」

## 22 太陽の足跡

花の咲くところ。

ネリネ「あ・・」

トリカブト「どうしました」

ネリネ「今のは、血の管理官？」

トリカブト「え？」

ネリネ「こんなところにいるわけじゃないですよ、こんな夜中に」

トリカブト「はっはっは、それはないですね。今頃ぐうぐう寝てますよ、避難の塔で。明日は誰に怒鳴ってやろうかと、そんなことばかり考えてるんですよ、あいつは」

ネリネ「きつと自分にも厳しい方なんですよ。そうやって、あの地位を手に入れた」

トリカブト「・・」

ネリネ「娘さんはそういえばどうされてるんですか」

トリカブト「あいつですか、あいつ、町が楽しいみたいで、帰ってこないんですよ。連絡も全然なくて」

ネリネ「そうなんですか」

トリカブト「好きな人がいるらしくてね。今頃二人で、人生を謳歌してるんとちゃうかなあ」

ネリネ「よかったです」

トリカブト「え」

ネリネ「娘さんが、自分の人生を生きることができて」

トリカブト「・・・そんな風に報告したかったです」

ネリネ「え？」

トリカブト「・・・」

ネリネ「違うんですか」

トリカブト「恋人が死んで、次は、娘の番です」

ネリネ「・・・」

トリカブト「あなたが生きていることがバレたら、娘も、殺されてしまいます」

トリカブトはネリネに近寄り、ネリネは後ずさる。

トリカブト「だから私はあなたを町に送りたい。何があっても、必ず生きて、町に戻って欲しいんです」

ネリネ「村長さん」

トリカブト「一つお願いがあります。もし無事に町に帰れたら、いつか、娘に文字を教えてやってください。本が読めたらあなたのように、見える世界が広がるでしょうから。私はダメな親でした。あいつを心配するあまり、あいつの心に乗っ取って生きて来たんです。それを愛だと思っ込んで」

ネリネ「私の母も同じです。でも私に、文字が読める楽しさを教えてくれたのも母でした」

トリカブト「私はあなたを必ず、町に送り届けます。この胸に誓って」

ネリネはリュウカを見かけたような気がする。二人はリュウカを探す。銃声。トリカブトは倒れる。遠くで再び銃を構えるザクロに、見つめられるネリネ。

ネリネ「よかったらこれ、一緒に読みませんか」

ネリネの手には本がある。

ザクロは銃を下ろす。

ネリネは子供のように黒子と遊ぶ。

## 23 エピローグ

ネリネとリュウカが出会う。

おしまい